

## 事象叙述述語の属性叙述化

言語学・応用言語学専門分野

2010(平成 22)年入学

1LT10114E

原 大樹

2014(平成 26)年 1 月提出

## 要旨

本論文では心理動詞 Y が、その Theme である X について「X ハ Y」という、Experiencer を含まない形で形成する文について考察した。心理動詞は、本来、事象叙述述語であると考えられるが、この「X ハ Y」の構文においては、Y が X の属性として解釈されている。このような事象叙述述語の属性叙述化がどのような条件のもとで起きるのかについて、従来の研究における分析では十分ではなかった。本論文では、特に同じ語根の形容詞形がある心理動詞、心理動詞の Theme の取る格、修飾部の有無による Theme と心理動詞の関係という 3 つの点に注目し、心理動詞の同じ語根の形容詞形が存在せず、心理動詞の Theme が二格を取りうる場合に心理動詞文「X ハ Y」の属性叙述化が起きることを明らかにした。

## 目次

1. はじめに.....	1
1.1. 対象とする心理動詞構文：「XハY」構文.....	1
1.2. 問題提起.....	1
2. 同じ語根の形容詞形がある心理動詞の場合.....	3
3. 「Xハ」の格が関わる場合.....	6
4. 「Xハ」の修飾部の有無が関わる場合.....	13
5. 先行研究.....	15
5.1. 益岡 (1987),(2000),(2004),(2008).....	15
5.2. 小竹・酒井 (2011).....	15
5.3. 三原 (2000).....	17
6. まとめ.....	19
参考文献.....	20
謝辞.....	21

### 1. はじめに

#### 1.1. 対象とする心理動詞構文：「XハY」構文

本論文では、(1a)、(1b)のような「XハY」という形式の文に注目する。

- (1) a. お世辞は照れる。
- b. 遅刻はあせる。

たとえば、(1a)の文は「お世辞は「照れる」ものであるという解釈であり、これは、「お世辞」が「照れる」という属性をもっているということである。また、(1b)の文は、「遅刻」が「あせる」ものであるという解釈であり、「遅刻が」が「あせる」という属性をもっているということである。これは、この形式を持つ文は、XがYの属性を持っているという意味になるということである。「照れる」や「あせる」のような動詞は、本来、事象を表わすはずであるが、(1a)や(1b)のようにXの属性を表わすことを、事象叙述述語の属性叙述化と呼ぶ。(1a)の「照れる」や(1b)の「あせる」は、動詞単体で見ると Experiencer と Theme をとる 2項動詞であると思われるにもかかわらず、Theme だけで文が成り立つ。人の心理状態や精神作用を表すこのような動詞を本論文では心理動詞と呼ぶ。言い換えれば、「XハY」という形式は、「X (YのTheme) ハ Y (心理動詞)」という形式のことである。

#### 1.2. 問題提起

心理動詞文「XハY」の構文は常に成り立つわけではない。たとえば、(2),(3),(4)の容認性は高いが、(5),(6),(7)の容認性は低い。

- (2) 雷の音は驚く。
- (3) 結婚はびびる。
- (4) きれいなフォームは憧れる。
- (5) ??雷の音は恐れる。 (小竹・酒井 2011: 22,(3a))
- (6) ??結婚は羨む。
- (7) ??フォームは憧れる。

(2)の「雷の音は驚く」が容認されるということは「驚く」が「雷の音」の属性になることができるということである。ところが、(5)の「雷の音は恐れる」の容認性が低いということは「恐れる」は「雷の音」の属性になることができないということであると考えられることができる。つまり、YがXの属性であるという解釈になるこの構文において、属性叙述化ができる場合とできない場合があるということである。

そこで、本論文では(8)の問題を明らかにしたい。

(8) どういう場合に心理動詞文「XはY」の構文の容認性に差が出るのか。

この問題に対し、本論文では(9)のように解答する。

- (9) a. 心理動詞に同じ語根の形容詞形がある場合、容認性が低くなる。  
b. 心理動詞の Theme がヲ格をとる場合、容認性が低くなる。  
c. (9a),(9b)の条件を満たしていても容認性が低い場合、Themeを修飾する要素があると容認性が高くなる。

本論文の構成は次の通りである。本論文の主張を3つの観点に分けて、2章、3章、4章でそれぞれ述べる。5章では、心理動詞を述語とする属性文について先行研究を取り上げる。6章はまとめとする。

## 2. 同じ語根の形容詞形がある心理動詞の場合

1章で、容認性が低い場合があることを指摘したが、本章では(6)について考察したい。

(6) ??結婚は羨む。

(6)で注目したいのは、「羨む」という心理動詞には、同じ語根の形容詞が存在しているということである。たとえば、(10)のように同じ語根の形容詞「羨ましい」がある。

(10) 結婚は羨ましい。

つまり、同じ語根の形容詞形が存在している心理動詞の場合容認性が低くなる。

(11) 心理動詞に同じ語根の形容詞形がある場合、容認性が低くなる。

形容詞というのは、そもそも属性を記述するという性質がある。

- (12) a. 富士山は美しい。  
b. 警察官は忙しい。

たとえば、「美しい」は「富士山」の属性として解釈され、「忙しい」は「警察官」の属性として解釈される。この現象を踏まえると、同じ語根の形容詞形がある心理動詞は属性を記述する形式をすでに持っているということであり、あらためて属性叙述化する手順を踏む必要がないため、属性叙述化が起こらないと考えても不思議ない。

一方、(13)のような同じ語根の形容詞形が存在しない心理動詞を述語とする文は容認可能である。

- (13) a. 寝坊はあせる。  
b. アクシデントは困る。  
c. 心霊現象はびっくりする。

他にも、「恐ろしい」という同じ語根の形容詞がある心理動詞「恐れる」は、(14)のように容認性が低い。

(14) a. 心霊写真は恐ろしい。 (形容詞形)

b. ??心霊写真は恐れる。 (動詞形)

以下、(15)-(30)も同じように、同じ語根の形容詞を持つ心理動詞の場合は容認性が低い。

(15) a. 卒論発表会は苦しい。 (形容詞形)

b. ??卒論発表会は苦しむ。 (動詞形)

(16) a. 失恋は悲しい。 (形容詞形)

b. ??失恋は悲しむ。 (動詞形)

(17) a. 初戦敗退は悔しい。 (形容詞形)

b. ??初戦敗退は悔やむ。 (動詞形)

(18) a. 飲み会は楽しい。 (形容詞形)

b. ??飲み会は楽しむ。 (動詞形)

(19) a. モラル低下は嘆かわしい。 (形容詞形)

b. ??モラル低下は嘆く。 (動詞形)

(20) a. 将来は悩ましい。 (形容詞形)

b. ??将来は悩む。 (動詞形)

(小竹・酒井 2011: 33,(33b))

(21) a. 花束のプレゼントは喜ばしい。 (形容詞形)

b. ??花束のプレゼントは喜ぶ。 (動詞形)

(小竹・酒井 2011: 22,(3b))

(22) a. 正月は慌ただしい。 (形容詞形)

b. ?正月は慌てる。 (動詞形)

(23) a. 景気回復は怪しい。 (形容詞形)

b. ??景気回復は怪しむ。 (動詞形)

(24) a. 子供はいとおいしい。 (形容詞形)

b. ??子供はいとおしむ。 (動詞形)

(25) a. 海外製はいぶかしい。 (形容詞形)

b. ??海外製はいぶかしむ。 (動詞形)

(26) a. お節介は疎ましい。 (形容詞形)

b. ??お節介は疎む。 (動詞形)

(27) a. 不正は苛立たしい (形容詞形)

b. ?不正は苛立つ。 (動詞形)

(28) a. 結婚は羨ましい。 (形容詞形)

b. ??結婚は羨む。 (動詞形)

(29) a. 学生時代は懐かしい。 (形容詞形)

b. ??学生時代は懐かしむ。 (動詞形)

(30) a. 戦争は憎い。 (形容詞形)

b. ??戦争は憎む。 (動詞形)

このように、同じ語根の形容詞形をもつ心理動詞を述語とする属性文は属性を記述する形式をすでに持っているために属性叙述化が起こらない。

### 3. 「Xハ」の格が関わる場合

2章では、同じ語根の形容詞形をもつ心理動詞を述語とする属性文は容認性が低くなるということを指摘したが、同じ語根の形容詞形が存在しない心理動詞の場合でも容認性が低い場合がある。

(31) ??失敗は憐れむ。

(31)は心理動詞に同じ語根の形容詞形が存在しないが容認性が低い。「憐れむ」という動詞だけでなく、この種の現象には他にも見られる。

(32) a. お世辞は照れる。  
b. ??お世辞は疑う。

(33) a. 旅行ははしゃぐ。  
b. ??旅行は羨む。

(34) a. 陰口はあきれれる。  
b. ??陰口はさげすむ。

(35) a. 手料理はほっとする。  
b. ??手料理は好く。

ここで注目してほしいのは、(32)-(35)の心理動詞の Theme の取る格の違いである。たとえば、(32)を見てみると、(32a)の動詞「照れる」の Theme は「お世辞に」となる二格であり、(32b)の動詞「疑う」の Theme は「お世辞を」となるヲ格である。さらに、(33a)を見てみると、「はしゃぐ」の Theme は「旅行に」となる二格であり、(33b)の動詞「羨む」の Theme は「旅行を」となるヲ格である。同様に、(34a)の動詞「呆れる」、(35a)の動詞「ほっとする」の Theme は二格であり、それに対して、(34b)の動詞「さげすむ」、(35b)の動詞「好く」の Theme はヲ格である。ということは、心理動詞の Theme が二格の場合には容認されるが、ヲ格の場合には容認性が低くなるということである。

これらの現象の観察から(36)のようなことが考えられる。

(36) ヲ型心理動詞を述語とするとき「XハY」の属性文の容認性が低くなる。

つまり、ヲ型心理動詞を述語とする場合は属性叙述化ができないということである。

清水 (2007)は、Theme がヲ格を取る心理動詞と Theme が二格を取る心理動詞で振る舞いが違うことを指摘している。(37)はヲ格を取る心理動詞群であると述べている。

#### (37) ヲ型心理動詞

あなどる、あやしむ、あやぶむ、あわれむ、いたむ、いつくしむ、いとう、いとおしむ、いぶかしむ、いぶかる、いむ、いやしむ、うたがう、うとむ、うとんじる、うやまう、うらむ、うらやむ、おしむ、きらう、このむ、さげすむ、したう、すく、そねむ、たつとぶ、とうとぶ、なつかしむ、にくむ、ねたむ、めでる

(清水 2007: 25, (3c))

(38),(39)は二格を取る心理動詞群、(40)はヲ格を取るが二格も取ることができる心理動詞群であると述べている。

#### (38) 二格誘因型心理動詞<sup>1</sup>

あきれる、あせる、あわてる、いじける、いらだつ、うっかりする、うっとりする、うろたえる、うんざりする、おごる、おじける、おどろく、おののく、おびえる、おろおろする、がっかりする、ぎよっとする、こまる、こりる、しょげる、じれる、しんみりする、てれる、はしゃぐ、はっとする、はにかむ、びくつく、びっくりする、びびる、ほっとする、まごつく、むくれる、めげる

(清水 2007: 24-25, (3a-①))

#### (39) 二格対象型心理動詞<sup>2</sup>

あきる、あきあきする、あこがれる、こがれる、ほれる、ほれぼれする、むかつく

(清水 2007: 25, (3a-②))

#### (40) 両用型心理動詞

いかる、いきどおる、うれえる、おこる、おそれる、かなしむ、くやむ、くるしむ、たのしむ、ためらう、なげく、なやむ、ひがむ、よろこぶ

(清水 2007: 25, (3b))

<sup>1</sup> 清水 (2007)によると、二格誘因型心理動詞とは直接受身にならないものである。

<sup>2</sup> 清水 (2007)によると、二格対象型心理動詞とは直接受身になるものである。

(36)で指摘したように、事実、ヲ格しかとらない(41)-(58)のヲ型心理動詞は容認性が低い。なお、3章で述べた形容詞形のある心理動詞は容認性が低くなることは示したので、ここでは載せていない。

- (41) a. ??格下はあなどる。  
b. 格下をあなどる。
- (42) a. ??発表はあやぶむ。  
b. 発表をあやぶむ。
- (43) a. ??戦没は悼む。  
b. 戦没を悼む。
- (44) a. ??花はいつくしむ。  
b. 花をいつくしむ。
- (45) a. ??宿題は厭う。  
b. 宿題を厭う。
- (46) a. ??挙動不審はいぶかる。  
b. 挙動不審をいぶかる。
- (47) a. ??停滞は忌む。  
b. 停滞を忌む。
- (48) a. ??ボイ捨ては卑しむ。  
b. ボイ捨てを卑しむ。
- (49) a. ??仲間は疎んじる。  
b. 仲間を疎んじる。
- (50) a. ??神仏は敬う。  
b. 神仏を敬う。
- (51) a. ??怪我は恨む。

- b. 怪我を恨む。

- (52) a. ??時間は惜しむ。  
b. 時間を惜しむ。

- (53) a. ??敬遠は嫌う。  
b. 敬遠を嫌う。

- (54) a. ??祖国は慕う。  
b. 祖国を慕う。

- (55) a. ??才能はそねむ。  
b. 才能をそねむ。

- (56) a. ??人命は尊ぶ。  
b. 人命を尊ぶ。

- (57) a. ??合格はねたむ。  
b. 合格をねたむ。

- (58) a. ??子供は愛でる。  
b. 子供を愛でる。

一方、Theme がニ格を取る(59)-(84)の例文は容認性が高くなる。

- (59) a. 仲間外れはいじける。  
b. 仲間外れにいじける。

- (60) a. 満月はうっとりする。  
b. 満月にうっとりする。

- (61) a. 出血はうろたえる。  
b. 出血にうろたえる。

- (62) a. 不義理はうんざりする。

- b. 不義理にうんざりする。
- (63) a. 違法行為はおじける。  
b. 違法行為におじける。
- (64) a. 雷の音は驚く。  
b. 雷の音に驚く。
- (65) a. テストはおののく。  
b. テストにおののく。
- (66) a. 戦場はおろおろする。  
b. 戦場におろおろする。
- (67) a. 失敗はがっかりする。  
b. 失敗にがっかりする。
- (68) a. 信号無視はぎよっとする。  
b. 信号無視にぎよっとする。
- (69) a. 落第は困る。  
b. 落第に困る。
- (70) a. 骨折は懲りる。  
b. 骨折に懲りる。
- (71) a. 説教はしよげる。  
b. 説教にしよげる。
- (72) a. 発売延期はじれる。  
b. 発売延期にじれる。
- (73) a. 寒い日はしんみりする。  
b. 寒い日にしんみりする。

- (74) a. お世辞は照れる。  
b. お世辞に照れる。
- (75) a. 新発見ははっとする。  
b. 新発見にはっとする。
- (76) a. 地震はびっくりする。  
b. 地震にびっくりする。
- (77) a. 取り調べはまごつく。  
b. 取り調べにまごつく。
- (78) a. 叱責はむくれる。  
b. 叱責にむくれる。
- (79) a. 学食は飽きる。  
b. 学食に飽きる。
- (80) a. 説教はあきあきする。  
b. 説教にあきあきする。
- (81) a. 女優は憧れる。  
b. 女優に憧れる。
- (82) a. 故郷は焦がれる。  
b. 故郷に焦がれる。
- (83) a. 金閣寺は惚れぼれする。  
b. 金閣寺に惚れぼれする。
- (84) a. 割り込みはむかつく。  
b. 割り込みにむかつく。

ニ格誘因型心理動詞の「おごる」、「おびえる」、「はにかむ」、「びくつく」、ニ格対

象型心理動詞の「ほれる」については5章で述べる<sup>3</sup>。

(85)-(90)は心理動詞の Theme が、ヲ格を取ることができるが、ニ格を取ることのできる  
ので、容認性が高くなる。

- (85) a. 他人の出世はひがむ。  
b. 他人の出世をひがむ。  
c. 他人の出世にひがむ。

- (86) a. 裏切りはいかる。  
b. 裏切りをいかる。  
c. 裏切りにいかる。

- (87) a. 不遇は憤る。  
b. 不遇を憤る。  
c. 不遇に憤る。

- (88) a. 日本の将来は憂える。  
b. 日本の将来を憂える。  
c. 日本の将来に憂える。

- (89) a. 手抜きはおこる。  
b. 手抜きをおこる。  
c. 手抜きにおこる。

- (90) a. 津波は恐れる。  
b. 津波を恐れる。  
c. 津波に恐れる。

以上の観察より、Theme がニ格の場合は属性叙述化が起りうるが、ヲ格の場合は属性  
叙述化が起らないということが分かった。

<sup>3</sup> (38)にあるニ格誘因型心理動詞の「うっかりする」は Theme にニ格を取るものが無いのでここでは対象としない。

#### 4. 「Xハ」の修飾部の有無が関わる場合

2章で指摘した心理動詞の同じ語根の形容詞形があるわけでもなく、さらに3章で指摘  
した心理動詞の Theme がヲ格を取らなくてもない場合であっても容認性が低い場合があ  
る。

- (91) a. ??支払いはためらう。 (小竹・酒井 2011: 29,(26b))  
b. 高額の支払いはためらう。

- (92) a. ??出来事はうろたえる。  
b. 予期せぬ出来事はうろたえる。

(91a)、(92a)は容認性が低い、(91b)、(92b)のように、修飾部があると容認性が高くなる。  
3章で指摘したように、Theme がヲ格の場合は属性叙述化が起きないが、Theme がニ格に  
なりうる場合は属性叙述化が起きる。そう考えると、(91)も(92)も、Theme がニ格になりう  
るので本来は本来属性叙述化が起っていると考えられる。それでも容認性が悪いのは、  
主題名詞句と心理動詞の関係が悪く構文として座りが悪いため容認性が低くなっている  
と考えるほかない。原因として認識しやすい修飾部が付くと容認されるようになる点を考慮  
しても、属性叙述化は起きていると考えるのが適切だろう。

以下、(93)-(100)のように、ニ格を取りうる心理動詞でも容認性が低い場合は、修飾部が  
付くと容認性が上がる。

- (93) a. 突然の返答は困る。  
b. ??返答は困る。 (小竹・酒井 2011: 23,(9b))

- (94) a. 慣れない仕事は戸惑う。 (小竹・酒井 2011: 31,(28b))  
b. ??仕事は戸惑う。

- (95) a. ?強大な財力は驕る。  
b. ??財力は驕る。

- (96) a. 突然の着信音はびくつく。  
b. ??着信音はびくつく。

- (97) a. 苛烈な批判は怯える。  
 b. ??批判は怯える。
- (98) a. ?熱烈な歓迎ははにかむ。  
 b. ??歓迎ははにかむ。
- (99) a. 派手な色合いは飽きる。  
 b. ??色合いは飽きる。
- (100) a. えくぼが素敵で女性に惚れる。  
 b. ??女性に惚れる。

(小竹・酒井 2011: 33,(35a))  
 (小竹・酒井 2011: 33,(35a))

このように、2章、3章の条件を満たしていても容認性が低い場合、Themeを修飾する要素があると容認性が高くなる。

## 5. 先行研究

### 5.1. 益岡 (1987),(2000),(2004),(2008)

益岡 (1987),(2000),(2004),(2008)では叙述の様式として対象の属性を叙述する属性叙述と、出来事を叙述する事象叙述として区別している<sup>4</sup>。

属性叙述とは(101)のように、対象が有する属性を述語が述べるもので、「主題(topic)+解説(comment)」という有題文の形を取るものであり、事象叙述とは(102)のように特定の時空間に実現する出来事を述べるもので、出来事を表す動詞を述語とした基本的に「補足語-述語」の構造を持つものであると述べられている。

- (101) a. 鈴木先生は生徒に厳しい。 (益岡 2000: 39, (1))  
 b. 日本は島国だ。 (益岡 2004: 6, (5))  
 c. 雪は白い。 (益岡 2004: 6, (6))

- (102) a. きのう近くのホールで鈴木さんが詩を朗読した。 (益岡 2000: 40, (3))  
 b. 父がプレゼントをくれた。 (益岡 2000: 44, (14))  
 c. 子供が笑った。 (益岡 2004: 4, (2))

そして、(103)のように、本来、事象叙述を表すはずの動詞述語が属性を表す現象があることを示している。このことを益岡 (2004)は「事象叙述述語の属性叙述化」と呼ぶと述べている。

- (103) こどもはよく泣く。 (益岡 2004: 8, (16))

### 5.2. 小竹・酒井 (2011)

小竹・酒井 (2011)は心理動詞を述語とする属性文の成立条件として以下のような提案をしている。

- (104) 経験者の明示されない属性文は、次の3つの条件をすべて満たさなければ成立しない
- a. 経験者の被動性：心理事象の成立に経験者が主体的に関与せず、経験者は専ら被動的であること。

<sup>4</sup> 益岡 (1987),(2000)は、佐久間 (1941)の「品定め文」と「物語り文」の区別に関する考察、三上 (1970)の「名詞文」と「動詞文」の区別に関する考察、川端 (1976)の「形容詞文」・「動詞文」という文の種類についての考察を引き継いだものと述べている。

- b. 主題の原因性：主題名詞句が述語となる心理動詞の原因補語であること。
- c. 事象の恒常性：心理事象が恒常的に成立すると話し手が認識していること。

(小竹・酒井 2011: 35)

例えば、小竹・酒井 (2011)は、(105)が属性文として成り立つとき(104)の成立条件を満たしていると述べている。

(105) 急な変更は困る。 (小竹・酒井 2011: 31, (28a))

(104a)の経験者が被動的であるかどうかは、(105)が(106)のテストを満たしているかで判定できる。

- (106) a. 否定命令文になれなければ、被動的である。
- b. (否定命令文になれても) 「人がどうしても～てしまう」という構文で容認可能ならば被動的である。

(107) a. ??急な変更に困るな。 (小竹・酒井 2011: 31, (28a))

- b. 急な変更は、人がどうしても困ってしまう。

(104b)の経験者が被動的であるかどうかは、(105)が(108)のテストを満たしているかで判定できる。

(108) 主格名詞句をデ格で言い換えても容認可能ならば、それは原因補語である。

(109) 急な変更 {に／で} 困る。

(104c)の経験者が被動的であるかどうかは、(105)が(110)のテストを満たしているかで判定できる。

- (110) 次のいずれかの場合に不自然であるならば、その文は恒常的である。
  - a. 未来を表す時間副詞を加えた場合
  - b. 「きっと」などの蓋然性の副詞を加えた場合
  - c. 経験者が一人称に限定される動作の様態を表す副詞句を加えた場合

(111) a. 急な変更は、(??今から) 困る。

- b. 急な変更は、(??きっと) 困る。
- c. 急な変更は、(??頭を抱えて) 困る。

本論文の主張に基づくと、小竹・酒井 (2011)が述べている事象の恒常性の側面は、本来テンスのあるはずの動詞が属性化している、つまり、テンスのない形容詞のようなものへ変化しているために得られるものであるということである。小竹・酒井 (2011)は成り立っている属性文の性質を指摘することに成功していると思われるものの、その条件すべてを満たしていても容認性が低くなる場合がある。

- (112) a. ??頭痛は悩む。
- b. 頭痛は人がどうしても悩んでしまう。(経験者の被動性を満たす)
- c. 頭痛で悩む。(原因性を満たす)
- d. 頭痛は(??明日) 悩んでしまう。(恒常性を満たす)

### 5.3. 三原 (2000)

三原 (2000)は心理動詞を(113)のように分類している。

- (113) a. 「ヲ」格句を伴う心理動詞は他動詞とする。
- b. 「ニ」格句を伴う心理動詞は直接受動文が可能ならば他動詞、不可能ならば自動詞とする。
- c. 長距離かき混ぜ操作によって島から要素を取り出した場合、弱い非容認性を示すのならばその心理動詞を他動詞、強い非容認性を示すのならばその心理動詞を自動詞とする。 (cf.三原 2000: 61, ①-③)

三原 (2000)では(113)の分類に基づいた自動詞について、対応する形容詞や「名詞+ダ」などの状態表現が欠如している心理動詞のとき心理的特性を述べる文になるということを指摘している。

- (114) a. そんなこと、困るよ。
- b. あいつの喋り方はイライラする。
- c. この喫茶店は落ち着く。
- d. うーん、その選択は迷うなあ。
- e. あいつの駄洒落は白ける。 (三原 2000: 65, (51))

(115) a. \*そんなこと、困りだ。

- b. \*あいつの喋り方はイライラだ。
- c. \*この喫茶店は落ち着きた。
- d. \*うーん、その選択は迷いだ。
- e. \*あいつの駄洒落は白けだ。

(三原 2000: 66, (52))

しかし、三原 (2000)は、対応する形容詞や「名詞+ダ」などの状態表現が欠如している心理動詞の自動詞<sup>5</sup>とき心理的特性を述べる文になると述べているが、他動詞の場合でも心理特性を述べる文になることができる。

- (116) a. 海外旅行は憧れる。  
 b. 自慢はむかつく。  
 c. 同じ味付けの料理は飽きる。

また、自動詞で「名詞+ダ」の状態表現があるにもかかわらず属性文として成立するものがある。

- (117) a. 基礎練習はうんざりする。  
 b. 基礎練習はうんざりだ。
- (118) a. 不合格はがっかりする。  
 b. 不合格はがっかりだ。

三原が指摘するように確かに対応する形容詞がある場合は心理動詞の属性叙述化が不可能であるが、他動詞・自動詞という観点ではなく Theme の格によって違いが出ているのである。

<sup>5</sup> 清水 (2007:24-25)を踏まえると二格誘因型動詞は直接受身が不可能なため自動詞、二格対象型動詞は直接受身が可能のため他動詞となる。

## 6. まとめ

本論文ではどのような場合に心理動詞文「X ハ Y」の構文の容認性に差が出るのかということについて考察を進めた。(9)が本論文の主張である。

- (9) a. 心理動詞に同じ語根の形容詞形がある場合、容認性が低くなる。  
 b. 心理動詞の Theme がヲ格をとる場合、容認性が低くなる。  
 c. (9a),(9b)の条件を満たしていても容認性が低い場合、Theme を修飾する要素があると容認性が高くなる。

本論文の主張を踏まえると、心理動詞に同じ語根の形容詞形が存在せず、心理動詞の Theme がニ格を取りうる場合に心理動詞文「X ハ Y」の属性叙述化が起きることを明らかにした。

## 参考文献

- 川端善明 (1976) 「用言」 大野晋・柴田武 (編) 『岩波講座日本語第 6 巻文法 I』 169-217. 東京: 岩波書店.
- 小竹直子・酒井弘 (2011) 「心理動詞による属性文の意味的成立条件」 『日本語文法』 11(1): 20-36.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 『主題の対照』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 『叙述類型論』 東京: くろしお出版.
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」 『日本語科学』 8: 54-74.
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 東京: くろしお出版.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 東京: 育英書院.
- 清水泰行 (2007) 「心理動詞の格と意味役割の対応・ずれ—「引用構文」における名詞句と引用節の意味関係から」 『日本文芸研究』 58(4): 23-29. 関西学院大学.

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、担当教員の上山あゆみ先生にはお忙しい中、丁寧な指導を頂きました。面談においてもメールでのやりとりにおいてもいつも私の納得するまで懇切丁寧に教えてくださったことで卒論への理解を深めることができました。この場を借りて深く感謝の意を申し上げます。また、九州大学文学部言語学研究室の東寺祐亮氏には何度も何度も面談をしていただき、自分の理解の及ばないところを指導していただき、本当に助けていただきました。完成までどり着くには東寺祐亮氏の指導が不可欠でした。心から感謝申し上げます。その他言語学研究室の皆さまはじめたくさんの方に支えられて、この論文を完成に至ることができました。本当にありがとうございました。